

分科会「ろう者と戦争」報告

司会：青山 直幹／助言者：堀 登喜雄

■戦争について聞いたこと、体験談（参加者）

修学旅行先の広島博物館で映画を見たが、「これは人間のやることではない」と強く感じた。湾岸戦争はまるでゲームみたい。広島原爆の方がむごたらしくて怖かった。

子供のころ、母と一緒に戦争の映画を見た後、戦争について色々聞いたことがある。特に戦時でのろう者はどうしていたか、関心がある。

少年時代、戦争ごっこをよくやったが、「戦争の恐ろしさ」なんかあまり感じられなかった。

「戦争はかっこいい」と言った為、学校の先生にひどく怒られたことがある。

「はだしのゲン」などの本を読んで、いつの間にか反戦の気持ちが強くなった。色々な所で戦争の恐ろしさを聞いてきたが、語り部は健聴者ばかりで、ろう者のお話を聞くのは今回が初めて。しかし、現代っ子の戦争に対するイメージの違いを心配している。

沖縄観光の時にお世話になったタクシー運転手は、戦時中米軍の激しい銃撃で肩甲骨を砕かれた。恨むのは「米軍じゃなく日本（政府）だ」という。その時、平和ボケに甘んじてきた自分に反戦の気持ちが芽生えてきた。

戦争がわれらの生活を奪ったのだ。昔はたくさんの土地を持つ裕福な生活だったが、父は戦場に出征され、母の力では家を支えることはできないので子供たちも一生懸命に働いた。しかし、とうとう財産が底を突いてしまい、窮乏生活を強いられた。母は毎日泣き崩れるばかりだった。戦後になっても土地なんか一坪も返って来ない。戦争は幸せを奪うものだ。絶対に起こるべきではない。

栃木の年輩／ろうあのため兵隊になれず山々の奥で朝鮮人や中国人と共に厳しい条件のもとで働かされた。朝鮮人などとコミュニケーションがスムーズに図れない健聴者に代わって、ろうあ者がリーダー格になって身振りなどで指揮を執ったそうだ。作業は一緒だが、食事は別々で、日本人はおいしいものが与えられたが、朝鮮人や中国人は少数しかもらえずいつもおなかを空かしていた。その様子を気の毒に思ったろうあ者は、随時人の目を盗んで食料を朝鮮人などに運んで分けた。しかし、しまいにはばれてしまい、びんたを食らった。戦後になって朝鮮人などからろうあ者の元に多数の感謝が寄せられたという。

あるおばあさん／家事中、空襲警報が鳴ると、飼い犬が「ワンワン」と吠えてくれたので何回も被害を免れた。これが日本最初の聴導犬ではないでしょうか。

お米をお腹に隠して妊婦を装い、検査を素通りしたろう女性も何人かおったそうだ。

岡山盲啞学校の寄宿舎は焼夷弾爆撃に見舞われ、1階の盲生徒はほとんど無事に避難できたが、2階のろうあ生徒はサイレンが聞こえないため逃げ遅れてほとんど変わり果てた姿になった。

戦争＝平和ではない。昔の場合は戦争は平和に結び付けないと考えられてきたが、現代の戦争は平和の手段の一つだという見方（戦争＝平和）もあるが、皆さんはどう考えるか？

沖縄の戦時のろう者の役割／健康な男性はほとんど戦場に動員したため、残ったのは女性、

老人、子供、病人、身障者。その中で一番体力あるろうあ者が避難の指示、物質の運搬などを担い、砲弾から守ったという証言がある。

小林よしのりのまんが「戦争論」は戦争を肯定しているので、首をかしげたくなる。

■被爆を受けた堀さん

◆爆心地は3ヶ所

高々度を飛ぶB29機から落下傘で落とされた原子爆弾が上空300mで爆発した。地上に落とされたのではなく上空爆発なので、どの爆心地が正しいのか判断できない。

◆被爆者健康手帳

第1種・・・爆心地から2km以内の被爆者

第2種・・・爆心地から2km以上の被爆者

堀さんは1600kmで被爆した。生活援護はなく、年金受給もなく、医療費が無料なのと健康管理手当が給付されるだけ。

◆最初は山口で木工関係の仕事をしたが、昭和19年11月、徴用工要員として広島軍艦製造下請け工場に雇われた。朝8時～夜10時まで休まずひるまずぶっ続け働いた。主に鉄砲玉入れケースの製造作業にかかった。原爆があった昭和20年8月6日は、木工機械を扱う仕事をした。仕事にかかるとすぐ、ベルトが切れたので、そのベルトを縫うためにしゃがんで、機械に囲まれた状態でトントンと修理すると、いきなりものすごい青黄色い閃光が走り、耳が裂けるような大音響が起り、たちまち屋根が崩れ落ち、その下敷きになった。

その時、頭に浮かんだのは、『とうとう広島市も空襲されたのか。やっこの怖い工場から脱出して山口に帰れるのだ！』とにかく下敷きから「助けてくれ～」と叫んだが、反応がまったくない。もちろん、広島市全体が破壊されつくしてしまったことは知らない。その時に思った気持ち『昼食のベルが鳴っても知らされず、十分や二十分は仕事を続けていることは毎度のこと、作業場の失敗はすべて私のせいだと片付けられ、巡回した軍人に殴られるのもしばしば、こんな場合も見捨てられて助けに来てもらえないのだと』、思わず涙をこぼした。

自力でがれきをかき分けてはい出したら、なんとさっきまでの広島市の面影は何一つもなく、家屋は崩壊し、4キロメートル先まで見通せるほど、街々は廢墟と化かした。あまりの異様な光景に呆然自失した。すずめの死骸がいっぱい。壁に人影が… これは爆風でたちまち消えた人の影だ。なんとすさまじいのではないか。家屋のかわらがアメみたいにトロトロ垂れ下がっていた。すると、黒い雨が降ってきた。

勤めた会社の従業員50人のうち、生き残ったのは私一人だけ。Vの形に折れた左腕のひどい痛みをこらえながらうろつくと、顔が風船のように膨れ上がった人、顔といわず手足といわずベタリとはげ落ちた人、男か女か区別がつかない人がたどたどしく歩いていた。それ等の人々と比べて私が一番マシな姿だった。さらにウロウロ歩き回ったら、人が沢山並んでいるのを見つけた。よく見ると怪我の手当てをしているらしいので私も並んで手当てを受けたが、いきなり左手首とヒジをつかんでひきのぼし、ありあわせの

板切れをあてがい、これもありあわせのボロ布で巻いて、傷には赤チンをザーッと塗っておしまい。まともな治療でなかったのが、特に寒いときや梅雨などひどく痛むのがしばしば、ひどいときは頭痛を伴うことがあった。半径300mぐらいのところを休んだり歩いたり、畑の食物を見つけてはとって食いながら何とか生き抜け、3日目によく山口行きのトラックに乗せてもらい、やっと広島市を脱出した。

■開戦から世界大戦への拡大

満州事変（昭和6年9月）がきっかけで日中戦争に発展し、そのまま第2次世界大戦に拡大し、15年間費やしたのが本当の歴史だが、ほとんどの人はそれを知らない。

昭和16年に勃発した第2次世界大戦から敗戦までの4年間と思っている人が多い。

- 1931年（昭和6年）9月……………満州事変 翌年、満州帝国建国
- 1937年（昭和12年）……………日中戦争本格化
- 1941年（昭和16年）……………第2次世界大戦に拡大
- 1945年（昭和20年）8月6日……………広島に原爆投下
9日……………長崎に原爆投下
15日……………終戦

■手話の禁止、義務教育でないろうあ教育

昭和8年皇民化政策が強化される中、鳩山一郎文部大臣により「手話から口話に」すすめる訓示が下された。それに伴い、手話を禁止する聾学校が増え、家の人からも厳しく手話の使用を禁じられた。

当時のろうあ教育は義務教育ではなかつたため、貧しい家庭の子供は行けない事情もあって読み書きできない人がかなり多い。また、富国強兵に力を入れるあまり、特にろうあ教育はなおざりにされ、義務教育の対象からはずされていた聾学校への補助金は削られ、中には聾学校を閉鎖し、軍需工場に働かされた人も多かった。ちなみにろうあ教育が義務教育になったのは昭和23年である。

■戦争がもたらした問題

◆戦争は兄弟関係を壊す、家庭まで壊すものである

- ・いつか健聴の息子が戦死するというのに、自分は兵役免除されたため周囲から白い目で見られ陰口を言われる有様。異端視されることを苦しみ悩んだ姉にはしつこく手話を使うなど締め付けられ、家に閉じ込められた。自分の問題をめぐって2人の姉にけんかが跡絶えず、とうとう絶縁してしまった。いまでも行方がわからずまい。

◆ろうあ者は情報から蚊帳の外

- ・サイレンが聞こえないため、洞窟に逃げようとしたらもう満杯で入れないことがよくあった。
- ・食糧配給の放送も全く聞けず、立ち遅れてもらえないことも多かった。
- ・情報が全く入れなかったことが一番困ったことだ。阪神大震災のときも同じことが起きている。時代が移り変わっても結局情報を得ることが困難なろうあ者は不利な立場にな

ることに変わりはない。

◆戦争でいいことなし！

・もし戦勝したら、身障者や老人などの弱者に対する差別や迫害、偏見は相変わらず続いただろう。

・戦争でよかったことは「敗戦したこと」だけだ。差別がなくなるからだ。

・戦争始まって平和なした。

反戦争＝平和　　戦争＝破滅

今の若者は戦争を知らなさ過ぎる。きちんとした教育をすることが大切ではないか。湾岸戦争を見て通り、罪のない市民まで巻き込まれ、ウラン放射能による奇形児が多く生まれてきているのではないか。戦争がなくならない限り、犠牲が増えるばかりだ。

◆軍事力強化＝生活力低下

軍事力を強くするほど、国民の生活力は弱くなる（国民生活が極端に悪化していく）。

■最初から原爆投下の目的にされた広島市

・他市は空襲による被害を受けたのに、広島市は何一つも空襲を受けていない。

広島市の原爆だけの破壊効果、殺傷効果を知るための実験目的が開戦の時点から予定されていた。

・史上初めて原爆が落とされた当時の新聞は、未だ「原子爆弾」という言葉はなく「特殊爆弾」と表記した。もちろん「放射能」の言葉もなかった当時だ。

■戦時中のろうあ者

◆きちんとしたろうあ協会があったら…

ろうあ者間の仲間、組織的なつながりはまったくなく、個々が自分の生き方を考える状態であった。戦前からきちんとしたろうあ協会があったら、被爆後もろうあ協会に助けを求めることができたはず。

戦前のろうあ協会は、名ばかりの団体でしかも中身は同窓会的なもので、今のような運動団体ではない。つまり、ろうあ協会は、われらにとって「砦（とりで）」であるから。

◆聾学校にも軍国主義教育を導入した

戦争の色が濃くなった19年、本土防衛のため、ますます人間統合が必要になり、「軍事教練」と「勤労働員」が徹底された。

「回れ右！」の号令が聞けないため、どうしても列の調和が乱れる。その代わりに、太鼓による音響で合図する方法を取り入れた。

鉄砲ではなく竹槍や銃剣術を強制させられた。そして、軍需工場などに動員され、勉学を放棄させられた。小学5、6年生も体力あるなら体力消耗する作業に働かせられた。とにかく「全面戦争」の様相が深まりつつある状態であった。

国民の経済、思想はもちろん私生活に至るまで、戦争中心に組み換えることが要求されていた。

◆ろうあ者は兵隊になれない

徴兵検査の結果は「甲（こう）、乙（おつ）、丙（へい）、丁（てい）」とランクがつけられ、甲種に合格した人は直ちに入隊する決まりだったが、ろうあ者はたいてい「丁」にされ、兵隊を免除された。

軍人でないもの、軍人になれないものは一人前の人間ではないとして差別視された。

■戦後～少しの間のろうあ者

◆一番の敵は「聾学校の先生」だ！

聾学校を卒業したろうあ者は、戦争が終わるとまず健聴者をすべて敵視した。間違いけど、ともかくそういう考え方を持っていた。敵の中で、一番憎んだのは「聾学校の先生」だった。生徒に対して、必ずといって一方的に怒鳴り散らす。困ったことがあって相談を持ちかけても、応じてくれず聞く耳も持たず一方的に怒鳴る。

「がまんしろ！」 「お前が悪いのだ！」

そういった差別的な教育のあり方をひどく恨んだものである。また身障者に対してひどい差別、迫害を与えた社会に対しても恨みを抱いていた。

■中国残留孤児にろうあ者、盲人がいないのが気になるが…

身障者を日本内の親戚にあずけて、満州や中国に渡ったため、残留孤児に邦人のろうあ者などはいない。

■これから絶対に戦争が起きないためには… 戦争を防ぐためにはどうしたらよいか（参加者）

- ・生の体験話を聞く機会を持つことが大切だと思う。
- ・記録を残すことが大切。活字離れが著しい現代に沿った本作りを考える必要があるんじゃないかな。
- ・お話を聞く、そして反戦の気持ちを育てることが大切だが、仮に北朝鮮から戦争を仕掛けられた場合、我らはどうすべきか？ 答えようがない。
- ・戦争の恐ろしさをしっかり覚えること。頭に刻むことが大切だと思う。
- ・民主主義的な考え方をもっと広めることが一番いい方法だと思う。民主主義国でない国々がまだあるから。
- ・「有事法」に反対する運動を粘り強くすること。
- ・世界各国が戦争を起こさない、平和であることを願いたい。
- ・テロが起きている国々がまだある。テロ根絶運動をすべきだ。
- ・戦争の怖さを語り継ぐ場を大切にしたいものだ。
- ・平和運動すること。
- ・教科書には戦争を美化するような内容がある。うそが多い。我らが正しい知識を持って事実を伝え継ぐ役目を持つことが大切。

■まとめ

1. 政府が考えを変えない限り、本当の平和は訪れない。
昔から、反戦運動が続いているのに、最近は「有事法」を推進する考えが進んでいる。そのためには戦争を賛美する国会議員を国会に送らないことだ。
平和的生存権をうたい、戦争放棄の規定をもつ日本国憲法のもとで「有事法」などの戦争絡みの法案を取り上げることは「公益」に合致することはない。
2. 戦争が始まると、真っ先に差別や迫害を受けるのは、ろうあ者を含めた社会的弱者である身障者であることは間違いない。
3. ろうあ者が一番困ることは情報から疎外されること。
4. 戦争はいずれの国においても食糧危機を生むものだ。
5. 戦争はただの撃ちごっこだけでなく、私生活にどう影響するか考えることが大切。
6. 防衛費に金を入れることは福祉の切捨てそのものだ。軍事に金をかけること＝私生活を窮乏させること それを防ぐ運動をすることを戦争に反対する運動に結びつけることは非常に大切。
7. 身障者を戦場に放棄してきた歴史について、心の痛みを持ち続けている人がいるが、この心の痛みこそ、平和の原点であり、身障者福祉の原点でもあると考えられる。身障者が放置される社会のゆくてには戦争があることを、いま一度考える必要がある。
8. 戦争の恐ろしさを語り継げる場を作って、戦争を防ぐ運動を拡大すること。しかし、いくら反対運動をがんばっても政府が方針を変えなければ運動自体が無意味になってしまう。

※参考…日本国憲法第9条「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決手段としては永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

いつまでも世界各国が平和でありますように！

(記録：青山 直幹)